

[総合的な学習の時間]

確かなふるさと観の育成を目指した地域素材の教材化

- 第6学年 「ヒスイと奴奈川姫の旅」の実践を通して -

渡邊 興勝*

1 はじめに

(1) 課題設定の理由

① 糸魚川市のふるさと教育のよさと課題から

糸魚川市では、昭和58年2月、糸魚川市小・中学校教育問題審議会により、「糸魚川市立小・中学校教育の在り方」について答申がなされ、翌年「ふるさと糸魚川教育実践要綱」が作られた。ここでは、小・中学校の果たす役割として次のようにまとめている。

折にふれて

- ① 「ふるさと糸魚川」を思ったり、学んだりし
 - ② その現状を喜んだり、心配したりし
 - ③ その発展を願ったり、力を尽くしたりしようとする
- 心豊かな市民を育成するために
小・中学校教育のあり方を見直し、組織・内容・方法を改善し
生き生きとした学校を実現する。

20年以上前からふるさと教育を推進し、毎年実践を積み重ねてきた教育実践記録集が20集を数えた。糸魚川は筆者のふるさとでもあり、我がふるさと糸魚川のために長い期間多くの先輩方が実践を積んでこられたことに敬意を表したい。

地域素材を吟味し、教材化することはふるさと教育ではまず大切なことである。ここで留意すべきは、ふるさとの「現状を喜んだり、心配したり」、「その発展を願ったり、力を尽くしたり」する子どもを育てるための教材になりうるか吟味することである。そのための大切な判断要素として、その素材の独自性、過去からずっと地域の人々に愛され、これからも伝えられていくであろう連続性、さらに他地域とのかかわり、そして子どもの発達段階に応じた知的欲求を満たしてくれるものであると筆者はとらえた。

そこで、本実践では、糸魚川・西頸城地方独自のものといえるヒスイと、奴奈川姫の伝説を追うこととした。この二つはともに糸魚川・西頸城地方独自のものであり、過去からずっと受け継がれてきた地域の宝である。また、その二つを通して国内のあらゆるところと交流があったことがうかがえる。素材を吟味し、教材化することで子どもが対象と主体的に向き合うだろう。そして、その中で過去や他地域とのかかわりから見える糸魚川と今自分たちが住んでいる糸魚川を比べ、「その現状を喜んだり、心配したり」、「その発展を願ったり、力を尽くしたり」する子どもの礎を育てることができるのではないかと考えた。

② 子どもの実態から

子どもたちは、3年生のときは糸魚川のよさを見つける活動、4年生のときは地域に伝わる塩作りや塩の道を追究する活動、5年生のときは古代米作りと地域の遺跡での縄文体験というように、総合的な学習の時間で「ふるさと糸魚川」について学んできた。糸魚川のよさ、歴史、文化に触れてきた子どもたちである。「糸魚川が好きですか?」という質問に対しては、71%の子どもが「好き」、24%の子どもが「まあまあ好き」と答えている。9割以上の子どもがふるさと糸魚川のことを好意的にとらえていることが分かる。

*糸魚川市立糸魚川東小学校

また、「糸魚川の自慢」を聞くと、55%の子どもが「ヒスイ」のことを挙げている。今まで学んできた「塩の道」や「縄文の遺跡」なども挙げられている。3年生からのふるさと教育で、子どもの多くが糸魚川のよさを、「糸魚川にしかないもの、人」という独自のものの中からはとらえることができている。学習が地域を見る目に生かされていると感じる。

しかし、糸魚川が好きな子どもたちであるが、その理由は、「空気がいいから」、「友達や家族がいるから」、「海と山に囲まれて、自然が豊かだから」などの一般的なものが多く、学習してきた糸魚川独自のよさが、自分の生活となかなかかかわりがなく、うかがえる。「糸魚川の自慢」が「糸魚川に住む自分の自慢」という面まで入り込んでいない。

そこで、今一度糸魚川の文化のルーツともいべき「ヒスイ」と、ヒスイ文化の象徴ともいわれる「奴奈川姫」をテーマにしてはどうかと子どもたちに呼びかけた。自分たちの住んでいるふるさとから全国に広まっていったヒスイ文化については子どもの関心が高く、「やってみよう」という声があがった。ヒスイと奴奈川姫を切り口に糸魚川のよさを深く追究し、一人ひとりの心に入り込む糸魚川のよさを感じさせたいと願った。

(2) 本活動対象の「ふるさと教育」としての価値と問題点

① 価値

古代、糸魚川・西頸城地方（以下、糸西）は姫川、青海川流域から採れるヒスイの加工の中心として全国的に有名であり、その交易は広範囲にわたる。日本全国から、糸魚川産のヒスイの加工品が出土している。校地に眠る笛吹田遺跡からもヒスイの加工場跡が発掘されていて、子どもたちの関心も高い。

また、そのヒスイ文化の象徴として、糸西には昔から奴奈川姫の伝説が多く残されている。糸西の人は奴奈川族の末裔であるという説もあり、興味深い。

つまり、ヒスイ、奴奈川姫は糸魚川の歴史と文化のルーツである。地域のことを学び続けてきた子どもたちにとって、この学習対象はふるさと教育の集大成として、また、6年生という段階を考えると最適であると考えた。

② 問題点

しかし、ヒスイはともかく奴奈川姫となると実在したのかすらよく分からない、歴史的には確証がもてない学習対象である。『古事記』に登場し、大国主命との相聞歌が全国的に有名であるが、『古事記』そのものが神話であり、その中に生きる伝説の女性である。また、学習を進める上で数々の神や神社にふれる。宗教的に偏ることがないように、配慮も必要である。これらの問題点を踏まえた上で、あえてこの対象を選んだのは、奴奈川姫にふるさとへの思いが詰まっているからである。

市内ではあちこちで奴奈川姫をモチーフにした看板や彫刻が見られる。また、本研究を進めた平成16年は、糸魚川市市制50周年にあたり、そのイベントの一つとして『歌劇奴奈川姫』の上演も決定していた。さらに、市町合併に伴う新市の名称の候補にも「ぬながわ」が挙がっていた。それほど地域に根付き、愛された伝説の人物を学ぶことは、今後糸魚川に生きる子どもたちにとって大変有意義なことであると考えたからである。

(3) 目指す子どもの姿

ヒスイや奴奈川姫神話から糸魚川の歴史と文化の源を探ることで、ふるさと糸魚川を多角的に見つめ直し、誇りをもつとともに愛着を深めることを目指したい。

2 研究の方法

(1) 活動名 ヒスイと奴奈川姫の旅（全96時間）

(2) 活動の目標

○ヒスイや奴奈川姫神話から糸魚川の歴史と文化の源を探ることで、ふるさと糸魚川に対する愛着を深め、糸魚川のよさを多くの人に伝えようとする態度を育てる。

(3) 活動展開の柱

目指す子どもの姿を具現化するため、次の2点を本研究の柱として設定した。

① 地域の人、ものとの直接的なかわり

現在、糸西のあちこちで、勾玉の形をした看板や、奴奈川姫の像を見かける。では、なぜヒスイなのか、奴奈川姫

なのか。ヒスイ文化や奴奈川姫の伝説の奥深さに目を向けると、課題は限りなく広がる。そして、子どもの疑問に答えてくれる人、関係機関も豊富である。地域のことであるので、繰り返し対象へかかわることもできる。

子どもの追究意欲の源は「なぜだろう」という疑問であり、事実を知ったときの「すごい」という驚きと課題解決時の「やったあ」という満足感である。それらの思いを繰り返し味わえる本活動では、追究意欲をもち、主体的に活動を展開していく子どもの姿が期待できる。

② 他地域とのかかわりを追う総合体験旅行

今までは糸魚川の中だけでの活動だったため、子どもの糸魚川に対する視点もなかなか広まらなかった。本活動では、他地域とのかかわりから、他地域にはない糸魚川独自のものに視点が広がっていく。その中で、子どもの糸魚川に対する愛情が深まり、自分も糸魚川市民であるという誇りをもつきっかけになるのではないかと考えている。

今までの学習で糸魚川のことを多面的に学んできた子どもたちである。糸魚川にはいろいろなよさがあることを知識として積み上げている。本活動では、その中からヒスイと奴奈川姫に焦点を絞ることで、糸魚川以外の地域とのかかわりにも目を向けていく。ヒスイ文化を追えば全国と、奴奈川姫を追えば県内各地や出雲（島根県）と、当時の糸魚川の関係を明らかにしなければならない。

そこで、総合的な学習の時間の大きなイベントとして、島根県出雲地方への総合体験旅行を実施した。小学生の旅行としては大掛かりなものだが、保護者の賛同も得られ、2泊3日で行ってきた。それまで調べてきたことの実証や新しい発見を目的とした。

3 結果

(1) 地域の人、ものとの直接的なかわり

① 地域の郷土史家や専門家とのかかわり

子どもたちが深く学ばば学ぶほど、『古事記』や『風土記』、専門書など、6年生には大変難解な資料に出くわす。一部の子どもの中にはそれが楽しく、どんどん追究を進めていくことができたが、ほとんどの子どもはそこで追究が行き詰まり、右往左往する。そんな時、子どもに分かる言葉で、丁寧に教えてくれるのが地域の郷土史家や専門家であった。

本研究では、地域の歴史に詳しく、著書も豊富な郷土史家に活動アドバイザーとなっていただき、年間を通して子どもの活動を支えていただいた。講義をしていただいたり質問に答えていただいたりするだけでなく、時には子どもの話し合いの中に入ってもらい、的確な助言をいただくことができた。

また、ヒスイのことを学ぶためにフォッサマグナミュージアムへ見学に行った。そこで学芸員の方からヒスイについて講義をしてもらい、子どもの疑問にも答えていただいた。その話の中に、実は糸魚川には立派な勾玉などのヒスイ製品はあまり残っていないことを教えてもらい、子どもの目は外へと広がった。また、奴奈川姫についても、「おじさんは本当はいないと思っているんだよね。」という衝撃的な発言があり、子どもたちの知的好奇心を揺さぶることができた。

② 直接体験で思いを広げる

前述の通り、難解な学習をしていると次第に子どもの中で、学習と生活とがかけ離れたものになっていくような様子が見て取れた。そこで、学んだことを実証したり、新しい発見を促したりすることを目的に、いくつかの直接体験の場を設定した。主なものを紹介する。

ア ヒスイ探し

糸魚川の海岸では時折ヒスイが見つかることから、ヒスイ海岸と呼ばれている。そこへ、ヒスイのことを調べている子どもが実際にヒスイをさがしに出かけた。1時間ほどの活動だったが、子どもが今までの調査から考える「ヒスイらしい石」を探すことができた。また、ヒスイ探しに来ていた地域の方からヒスイ探しのポイントやヒスイの特徴を教えてもらうこともできた。

後日鑑定してもらった結果、全てヒスイではなかったのだが、そのことが子どもの中でヒスイの価値を高め、ますます学習にのめりこんでいく姿が見られ、その後も休日などを利用してヒスイ探しを続けた子どももいた。

イ 遺跡発掘体験

校地脇に道路ができることになり、下に眠っている笛吹田遺跡の一部を発掘調査することになった。そこで、関係者にお願ひし、発掘調査を体験させてもらった。[写真1]

時代でいうと古墳時代から平安時代のものが多いのだが、以前の調査で勾玉工房跡や加工中の玉が見つかっており、

どの子も「ヒスイの原石か勾玉を見つけるぞ」と意気込んでいた。また、指導者の、「この間勾玉が出たよ。頑張ってるね。」との激励の言葉に、言葉を発するのも忘れて発掘作業に没頭した。

結局全員が土器のかけらを見つけ出したが、ヒスイや勾玉は出てこなかった。しかし、全員が土器のかけらを見つけたことで、確かに人が住んでいたことを体感し、歴史のつながりの不思議さを感じることができた。

また、発掘が終了している場所の見学で、指導者から、「ここで出土した土器はきれいに並んで黒姫山のほうを向いています。黒姫山には奴奈川姫が住んでいたとの伝説もあり、おもしろいですね。」とのお話があり、より一層意欲や理解を深めることができた。



写真1 遺跡発掘体験の様子

(2) 他地域とのかかわりを追う総合体験旅行

① 総合体験旅行のねらい

○糸魚川と出雲地方（島根県）のかかわりを現地で学ぶことで、当時の糸魚川文化の他地域とのつながりについての視点を広げる。

- ・現地に残る糸魚川文化のあとを訪れることで、当時の文化のすばらしさを感じ、ふるさと糸魚川に対する愛着を深める。
- ・糸魚川と交流のあった時代の出雲地方の遺跡を調べることで、どのような背景でヒスイや奴奈川姫が必要とされたのか考える。
- ・現地の人と交流し、現在も糸魚川の文化のあとが残っていることを知る。
- ・今後の追究課題をもつ。

② 総合体験旅行の実際

2泊3日の行程で実施した。片道およそ800km、移動には電車を乗り継ぎ10時間近くかかる。これほどまでに遠くの地方と、神話の時代からかかわりがあったということに子どもはまず驚いた。

見学場所は〔表1〕に示すとおり、糸魚川とのかかわりがある場所や、当時の出雲地方の勢力の大きさが分かる遺跡などを選んだ。

表1 総合宿泊体験旅行の見学先

見学場所	糸魚川とのかかわりなど	見学を終えての子どもの感想
出雲市古志町	『出雲国風土記』 古志郷。……古志の国人等到来りて、堤を為りて（略）。故、古志といふ。 「古志」……「越」のこと。北陸一帯をさす。 「堤」……当時作られた堤、池が残っている。 堤を築いた古志人のリーダーのものと伝えられている古墳がある。	・大昔につくった堤が残っていてびっくりした。ほくたちの先祖が本当につくったのならすごいと思った。 ・古墳の中に初めて入った。思ったより小さかったけど、いい経験になった。
西谷墳墓群史跡公園	四隅突出型墳丘墓という不思議な形の墳墓が集まる歴史遺産。弥生時代。北陸産の土器が発掘されている。	・北陸産の土器があって、本当に交流があったんだなあと思った。 ・当時の出雲には大きな勢力があったことが分かった。
荒神谷遺跡公園	358本の銅剣、銅鐸6個、銅矛16本出土（国宝）。このことにより、九州と近畿が古代の中心と考えられていた古代史を覆し、両者に匹敵する巨大勢力が出雲に存在したという説がクローズアップされた。	・当時の出雲には大きな勢力があったことが分かった。銅剣がきれいに並んで発見されていてすごかった。
玉作遺跡	古墳時代、花仙山からとれるめのう、碧玉を使った玉作りがさかんに行われた。勾玉作りの工程は糸魚川のものによく似ている。 全国唯一の玉作り資料館あり。	・糸魚川は石を拾うけど、出雲は石を山から削りだすことが分かった。 ・つくり方は似ていた。 ・碧玉はヒスイの色と似ている緑色だった。
出雲大社	主祭神 大国主命 本殿（国宝） 日本で一番古い神社建築様式の一つ 宝物殿 糸魚川産の硬玉勾玉展示	・こんな大きな神社の神様に求婚された奴奈川姫はすごいと思った。 ・大国主命はとてもすごい人だったんだということが分かった。

美保神社	『出雲国風土記』 美保の郷。……天の下造らしし大神の命、高志の国に坐す神、意支都久辰為命の子、俣都久辰為のみ子、奴奈宜波比売命にみ娶ひまして、産みまし神、御穂須々美命、是の神坐す。故、美保という。 大国主命が奴奈川姫に産ませた子の名前が地名の由来であるとされている。 奴奈川姫、建御名方命（奴奈川姫の子ども）も祭られている。	<ul style="list-style-type: none"> ・こんなに離れた土地で、奴奈川姫が祭られているのがすごいと思った。 ・奴奈川姫の子どもとされている御穂須々美命は、建御名方命と同一人物なのだろうか。
鳥根県立博物館	常設展 鳥根 悠久の歴史と文化 常設展示 国宝 荒神谷遺跡出土青銅器 重文 加茂岩倉遺跡出土青銅器 他にも 出雲大社本殿復元模型 玉造の資料 など	<ul style="list-style-type: none"> ・本物の国宝が見れて感動した。 ・大昔、出雲大社はものすごく大きかったことが分かった。

旅行では、見学の際に現地の観光ボランティアを利用し、現地の人目から解説をしてもらった。糸魚川から来たことにボランティアの方は皆驚いたが、説明の中で糸魚川と出雲のかかわりをうまく取り上げてくださり、子どもの驚きと知的好奇心を高めることができた。〔写真2〕

また、見学の後に毎晩1時間30分の学習会を開き、感想をまとめて発表したり、話し合ったりした。このとき話し合った議題「糸魚川と出雲はお互い何を求めて交流したのか」はその後の学校での学習の課題になり、アドバイザーの郷土史家を交えて討論会を開くまでになった。1日の見学の疲れもあっただろうが、皆驚くほど真剣に学習を深めようとしていた。これこそ、現地へ来て学習するよさだと思う。〔写真3〕

子どもの感想を見てみると、どの子どもも糸魚川と出雲のかかわりとの出会いに感動を覚えているようであった。特に、2日目の最後に行った出雲大社では、その建築の大きさや、宝物殿に展示されている糸魚川産のヒスイの勾玉の美しさを目の当たりにし、多くの子どもが感想文の中に「感動した」という言葉を書いた。ある子どもは、一日の見学の感想文に次のように書いている。

「今日、一番楽しみにしていた出雲大社に行きました。とても大きな神社で驚きました。また、宝物殿で見たヒスイの勾玉はとてもきれいでした。こんなにすごい勢力のある出雲と交流のあった糸魚川もすごいところなんだと思いました。(筆者抜粋)」

他にも、何人もの子どもが同様の感想を書いていた。当時の出雲の勢力の大きさから、そういう地方から求められた糸魚川のよさを見直し、ふるさとの誇りをもち始めた子どもが多くいたことが分かった。



写真2 出雲大社で説明を受ける

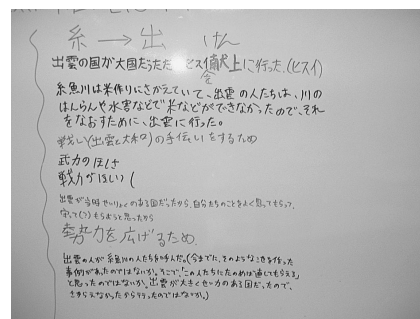


写真3 学習会で話し合った内容

4 考察

(1) 地域素材を吟味し、教材化することの有効性

① ふるさとを他地域とのかかわりという面から再評価する

前年度までの学習で糸魚川のよさを、糸魚川固有のものの中から見いだすことができた子どもたちである。そしてその中心が、ヒスイと奴奈川姫であった。本実践では、それらを焦点化して教材化することで、それらが日本全国に広がり、高く評価され大切にされてきたことを専門家の話や旅行で確信し、子どもの驚きと地域の再評価を促すことができた。特に、出雲への総合体験旅行を通し、行く先々で糸魚川とのかかわりを確認し、とても興奮する子どもの姿があった。

ある子どもは、旅行の感想の最後で、「糸魚川に伝わるヒスイや奴奈川姫が、大昔にこんなに遠くまで来ていたことがはっきりして、とてもすごいと思いました。これからも大切にしていきたいです。とても勉強になる旅行でした。」とまとめている。この子どもに限らず、多くの子どもが他地域との大昔からのつながりに驚き、自分たちのふるさとの伝わるヒスイや奴奈川姫に対する誇りを一層高くもつことができた。

地域のよさは、そこに住む人の思いも大切だが、他地域から評価されることでより確かなものになる。本研究を通して糸魚川固有の、しかも他地域とのかかわりがある素材を教材化することで、子どもたちがふるさと糸魚川のよさを再評価し、確かなふるさとへの自信をもたせることができたのではないかと考える。

② ふるさとの素材に対する思いをもつ人たちとのかかわり

本実践では、地域の郷土史家をはじめ、学芸員や遺跡の発掘作業員など、ヒスイや奴奈川姫に並々ならぬ情熱をもっている方とのかかわりがあった。地域の宝はそこに住む人々の誇りである。そういう生き方をしておられる方とのかかわりは、子どもたちにとって大きなプラスになったであろう。

また、現在も遠く離れた出雲の地でも、糸魚川のことを研究し何度か訪れている人と会うことができた。糸魚川は、実はすごいところなのだという思いを子どもたちにもたせることができたと考えている。

③ ふるさとの「現状を喜んだり、心配したり」、「その発展を願ったり、力を尽くしたり」する子どもの育成

本実践を通し、このような子どもを育成できたかどうかは断言できない。ただ、今まで以上に地域に愛着をもつ子どもを育てられたと感じている。そしてそれは、同時に当校でのふるさと学習4年間の成果でもある。ある子どもは、年度末のまとめで糸魚川東小で学んだ4年間の総合的な学習の時間を振り返り、次のように書いている。

「糸魚川東小学校の総合的な学習で、地域のことをたくさん知ることができました。今まで知らなかったことやそれほど大切に思っていなかったことがよく分かり、本当によかったです。特に、とても遠くの地方との交流があったことが分かり驚きました。これからも地域を大切にしていきたいです。」

〔図1〕にもあるように、当該学年の子どもたちは、4年間ふるさとを対象に総合的な学習を積み重ねてきた。その学年に合った活動を通し、地域の人とのかかわりを深め、地域の歴史を知り、他地域とのかかわりを学んできた。

その総仕上げが本実践である。小学校生活最後の年に本実践を行うことにより、今までの学びを総括し、ふるさと学習で学んだことを一人一人がまとめることができた。この経験が、将来ふるさとを大切に思い、「現状を喜んだり、心配したり」、「その発展を願ったり、力を尽くしたり」する源になってくれることを願う。

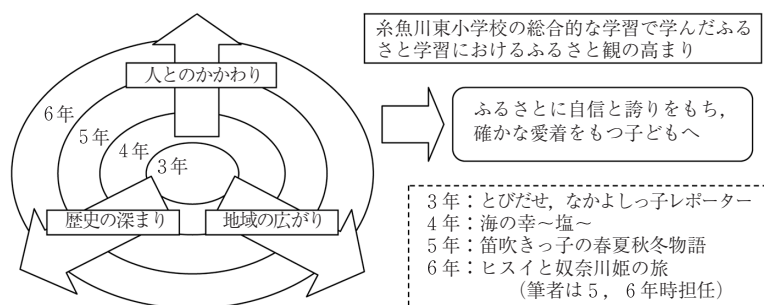


図1 糸魚川東小 総合的な学習の時間によるふるさと観の高まり

(2) 課題

ふるさと糸魚川をヒスイと奴奈川姫という絞られた視点から追究し、一応の成果を見たが、実践上の課題、反省点も数多い。その中でも、特に今後自らの課題として2点挙げる。

- ・個人の課題を解決するための資料が難解で、一人一人の課題解決欲求に迅速に応えることができなかった。
- ・時数が予想以上にかかり、予定していた活動でできなかったものもあった。本来であればもっと多くのフィールドワークや糸魚川PR活動をし、子どもの考えを外に発信する学習を展開したかった。時数管理の重要性、見通しの大切さを痛感した。

5 おわりに

平成17年3月、糸魚川・西頸城の1市2町が合併して新しい糸魚川市が生まれた。ヒスイと奴奈川姫の里が一つの自治体になったわけである。面積は大きくなり、人口もそれに伴い増加したが、子どもの数は減り、若い人がどんどん流出していく過疎地域である。糸魚川市民としてさびしい現状であるが、それを食い止めるのは難しい。

「はじめに」で述べた「ふるさと糸魚川教育実践要項」が作られた昭和59年は、大変子どもの多い時期であった。市街地にも活気があった。わずか20年前である。今、要項を読み返すと、当時からこの状況が危惧されていたのではないかと感じる。だからこそ今、当時のままの「ふるさと糸魚川教育実践要項」の志を大切にしたい。

ふるさと教育は、子どもの心の中に「ふるさと観」を育てることであり、ふるさとに対する思いを深めることである。そして、将来にわたりふるさとが好きでいられるための根拠を子どもに植え付けていく学びの連続でありたい。本研究のねらいも、詰まるところその1点である。この研究が、子どもたちが大人になったときに糸魚川を振り返る一つの材料を提示できていれば、筆者の思いは遂げられたと言ってもよい。

今後とも地域の魅力ある素材に目を向け、有効な教材化を目指しながら実践を積み重ねたい。

〔参考文献〕

糸魚川市教育委員会・糸魚川市教員協議会 「ふるさと糸魚川教育実践記録集第20集」